

[講演要旨] 昭和三陸地震津波(1933)における共助と復興支援

弘前大学 大学院地域社会研究科* 白石 睦弥

§1. はじめに

昭和三陸地震津波は、昭和8年(1933)3月3日午前2時31分に三陸沖を震源として発生した地震(マグニチュード 8.1)と、それに伴い発生した津波により北海道・青森県・岩手県・宮城県の各道県に被害を及ぼした。

この地震は日本海溝に沿って、太平洋プレートの折れ曲がり地点で正断層運動が発生したもので、最大震度は岩手県・宮城県の沿岸などでVを記録し、有感域は関西地方にまで及んだ。津波は驗潮儀記録によれば、わずかな上げ潮で始まり、これに続いて引き潮が多く地点で確認された。その後、地震の揺れから30分から1時間後に各地に津波が到達した(『日本歴史災害事典』昭和三陸地震津波の項・宇佐美龍夫『最新版日本地震被害総覧』№471 昭和三陸地震津波の項)。

§2. 昭和三陸地震津波の被害概要と背景

昭和三陸地震津波では、地震による被害は少なく、津波による被害が顕著であった。津波の這い上がった高さは綾里(現大船渡市)において23.0メートルなどで、三陸沿岸を中心とする各地に死傷者・家屋流失倒壊など多くの被害をもたらした(図1・表1)。

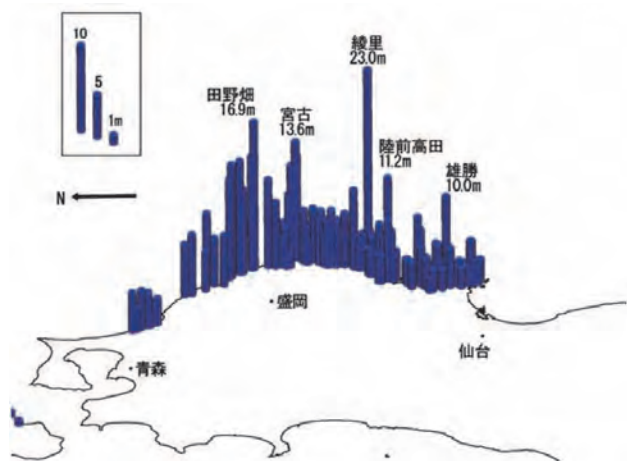


図1 昭和三陸津波における各地の津波の高さ
(『日本の地震活動』92頁より)

明治29年(1896)の明治三陸地震津波から40年を経ずして発生したこの震災は、被災地域だけでなく全国的な災害に対する意識を高めることとなった。同震災は、北原糸子氏の分類によるとおり、近現代災害の中では第Ⅲ期「戦時体制下の災害」に位置づけられ(北原糸子『津波災害と近代日本』15-22頁)、大日本帝国の国際連盟脱退と前後して発生した。しかし、その最中にもかかわらず、国による同震災への対応は大正12年(1923)に発生した大正関東地震のイメージを受け継ぎ、迅速なものであった。さらに、陸海軍の対応も速やかで、在郷軍人が総出動したほか医療救護に尽力した。

§3. 昭和三陸地震津波にみる共助と復興支援

昭和三陸地震津波は、東北地方の視点に鑑みれば、昭和5年の昭和恐慌、翌6年の冷害と農村疲弊が連続した後の漁村への打撃ととらえることもできる。

現在、内閣府などでは「地域コミュニティにおける助け合い」などを共助と定義しており、当然それは阪神・淡路大震災(1995年)や東日本大震災(2011年)にも見られたことではあるが、前述の通り、地域間や地域コミュニティの中での共助については、当時の東北地方はあまりに非力であったと言わざるを得ない。一方で、隣接集落を救援に行った話も新聞に美談として掲載されている例もある(『河北新報』昭和8年3月11日)。

そのほかに初期の地域復興の力となったものとして、ボランティア的動向が見られる。消防組や青年団・愛国婦人会など、そもそも組織化されているものが対応した場合と、個人が対応した場合に分けられるようであり、震嘯災一周年に際しての表彰者一覧(『宮城県昭和震嘯誌』46-55頁)には、団体だけでなく個人名も見られる。

謝辞

北原糸子先生から、昭和三陸地震津波に関する多くの史料の提供とご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

県	人命(人)				家屋(棟)					船舶(艘)		
	死者	傷者	不明	計	流失	倒壊	焼失	浸水	計	流失	破損	計
岩手県	1,408	805	1,263	3,476	2,969	1,111	201	2,076	6,357	6,768	1,536	8,304
宮城県	315	151	105	571	399	240		1,645	2,284			2,208

表1 昭和三陸津波による岩手県・宮城県の被害(『岩手県昭和震災誌』・『宮城県昭和震嘯誌』より)

* 〒036-8560 青森県弘前市文京町1
電子メール: mutsumi.o.shiraishi @ gmail.com